

アンデス・アマゾン学会
研究発表要旨集

Proceedings of the Annual Conference of SAAS

Volume 14

2025

アンデス・アマゾン学会
Society for Andean and Amazonian Studies
Japan
[<https://sanams.web.fc2.com>]



アンデス・アマゾン学会研究発表要旨集

第14号

2025

【目次】

アンデス・アマゾン学会第14回研究大会プログラム		1
持続可能な給食実施のモデル作り：エクアドル北部アンデス山間部小規模小学校の挑戦	杉田優子	3
南米ラクダ科動物の毛色・模様分類と品質改良：ペルー南部の事例	鳥塚あゆち	5
大地信仰と互酬制に関して	岡本年正	7
アラゴン連合王国：インカの自称「タワンティンスユ」の源泉	大平秀一	9
ペルーアンデス中北部における植民地社会の形成：16世紀カエホン・デ・ワイラスのスペイン人と先住民	真鍋周三	11
アヤクチョの歌と踊りと Taki Oncoy について	佐々木直美	13
樹木に現れたキリストの顛末：アンデス世界の民衆カトリシズム	加藤隆浩	15
<i>Por favor</i> como estrategia de atenuación en peticiones en el español hablado en Medellín (Colombia)	Ji Son Jang	17
Autoideologías hacia el español pastuso (Colombia)	Ana Isabel García Tesoro	19
レイメバンバ共同体博物館の現状と課題	上原なつき	21
近年の南アンデス・ケチュア語口承文学におけるテキスト公刊とその「読み」の可能性	藤田護	23
ボルソナロ政権期のブラジル土地改革と小農たち	石丸香苗	25
奥付		27

Proceedings of the Annual Conference of SAAS

Volume 14

2025

【CONTENTS】

The 14th Annual Conference of SAAS Program		1
Creación de un modelo para la implementación de alimentación escolar sostenibles: el desafío de una pequeña escuela primaria en la cordillera de los andes del norte de Ecuador	Yuko SUGITA	3
Clasificación de los colores y distribución de manchas en camélidos sudamericanos: el caso del sur de Perú	Ayuchi TORITSUKA	5
The Interrelations Between Earth Beliefs and Reciprocity in Cuzco, Perú	Toshimasa OKAMOTO	7
Corona de Aragón: el origen del nombre “Tahuantinsuyu”	Shuichi ODAIRA	9
La formación de la sociedad colonial en el norte-centro de los Andes peruanos: Españoles e indígenas en Callejón de Huaylas del siglo XVI	Shuzo MANABE	11
Reconsideraciones de los canto, baile y Taki Oncoy	Naomi SASAKI	13
Details of Appearance of Jesus in the Andean World	Takahiro KATO	15
<i>Please</i> as a mitigation strategy in requests in Spanish spoken in Medellín (Colombia)	Ji Son JANG	17
Autoideologies toward Pastuso Spanish (Colombia)	Ana Isabel GARCÍA TESORO	19
Situación actual y dificultades del Museo Comunitario Leymebamba	Natsuki UEHARA	21
Las recientes publicaciones de la literatura oral quechua surandina y sus posibles lecturas	Mamoru FUJITA	23
Brazil's Agrarian Reform and Small farmers under the Bolsonaro Administration	Kanae ISHIMARU	25
Imprint		27

アンデス・アマゾン学会 第 14 回研究大会 プログラム

The 14th Annual Conference of SAAS Program

期日：2025 年 7 月 5 日（土）、6 日（日）

会場：tdi 人材開発センター湯河原 研修室 D（面接と Zoom によるハイフレックス）

1 日目（7 月 5 日[土]）

司会：長尾直洋（名桜大学）

13:05-13:10 開会挨拶

第 14 回研究大会実行委員長 佐々木直美

13:10-13:45

持続可能な給食実施のモデル作り：エクアドル北部アンデス山間部小規模校の挑戦

杉田優子（認定 NPO 法人 エクアドルの子どものための友人の会）

13:45-14:20

南米ラクダ科動物の毛色・模様分類と品質改良：ペルー南部の事例

鳥塚あゆち（青山学院大学）

14:20-14:55

大地信仰と互酬制に関して

岡本年正（帝京大学）

14:55-15:05

休憩

15:05-15:40

アラゴン連合王国：インカの自称「タワンティンスユ」の源泉

大平秀一（東海大学）

15:40-16:15

ペルーアンデス中北部における植民地社会の形成：16 世紀カエホン・デ・ワイラスのスペイン人と先住民

真鍋周三（兵庫県立大学）

16:15-16:50

アヤクチョの歌と踊りと Taki Onqoy について

佐々木直美（法政大学）

16:50-17:25

樹木に現れたキリストの顛末：アンデス世界の民衆カトリシズム

加藤隆浩

17:25-17:55

総会

2 日目 (7 月 6 日[日])

司会：河邊真次 (三重大学)

9:00-9:35

Por favor como estrategia de atenuación en peticiones en el español hablado en Medellín (Colombia)

Ji Son JANG (Universidad de Antioquia)

9:35-10:10

Autoideologías hacia el español pastuso (Colombia)

Ana Isabel GARCÍA TESORO (Universidad de Antioquia)

10:10-10:45

レイメバンバ共同体博物館の現状と課題

上原なつき (名桜大学)

10:45-10:55

休憩

10:55-11:30

近年の南アンデス・ケチュア語口承文学におけるテキスト公刊とその「読み」の可能性

藤田護 (アンデス・オーラルヒストリー工房、慶應義塾大学)

11:30-12:05

ボルソナロ政権期のブラジル土地改革と小農たち

石丸香苗 (福井県立大学)

12:05-12:40

制度から見るアンデス先住民社会

木村秀雄 (自由学園最高学部)

12:40-12:45

閉会挨拶

アンデス・アマゾン学会会長 大平秀一

※ 木村秀雄先生は 2025 年 10 月 11 日にご逝去され、PACSAAS14 号への発表要旨掲載が
ないませんでした。

持続可能な給食実施のモデル作り：エクアドル北部アンデス山間部小規模校の挑戦

杉田優子（認定 NPO 法人 エクアドルの子どものための友人の会）

キーワード： 国際協力、地域と学校、持続可能な給食実施、異文化間二言語教育

Creación de un modelo para la implementación de alimentación escolar sostenible: el desafío de una pequeña escuela primaria en la cordillera de los andes del norte de Ecuador

Yuko SUGITA

（“Sociedad de Amigos del Niño Ecuatoriano”, organización sin fines de lucro certificada）

Keywords: Cooperación internacional, comunidad y escuela, la implementación sostenible de programas de alimentación escolar, educación intercultural bilingüe

1. はじめに

当会は、学校菜園と学校給食を通した子どもの学校生活の向上を目的に、2022 年までコロナ禍の中 3 年余 JICA 委託事業に取り組んできた。しかし事業後の給食継続が困難という現実を見て、これを可能にすることを目的に 2023 年から 3 年間の予定で味の素ファンデーション（AIN）助成事業に取り組んでいる。対象の異文化間二言語教育校であるウンベルトフィエロ校（HF 校）は筆者が研究対象にしてきたが、2010 年に 200 人弱いた生徒が、現在は 47 人にまで減少している。過疎化の状況において今回の事業が生んでいく学校と地域へのインパクトを報告する。

2. エクアドルの学校給食と生徒の栄養状態

2007 年に発足したコレア政権の大胆な教育政策の一つであった給食改革で、それまで不十分だった昼食をやめて、朝食としてシリアルバーとビタミン入りのコラーダの配布を始めた。ところが、小学校課程に組み入れられた 3 歳以上の子どもたちのカロリー不足が顕著に見られるようになった。国連 WFP によるとエクアドルの 5～9 歳の子ども 21%、10～14 歳の子ども 40%が朝食をとらずに登校しており、子どもの慢性栄養不良率は 23%となっている。栄養価の高い食べ物を入手できる世帯の割合は 50%にとどまり、これが学習障害、成長障害の原因となっている。これに対する政府や支援団体からの一時的な支援や、地域に限られた支援はあるもの

の、根本的な解決には至っていない。

3. 持続可能な給食事業とは

当会は 2003 年以降学校菜園事業を行ってきた。JICA 委託事業では学校菜園の収穫物の学校給食への使用に焦点を当てたが、この事業終了後の反省点は、レシピの開発や学校菜園からの食材の提供だけでは事業後の持続はできないというシンプルなことであった。そこで本事業では学校給食システムを根本から見直し事業校を 1 校に絞り、下記のように事業の 3 つの軸を据えて持続可能な給食実施モデルの完成を目指した。

第 1 の軸：保護者主体の給食委員会の構築

第 2 の軸：教材を活かした栄養教育の実施

第 3 の軸：学校を支える現地での資金支援

実施においては、特に以下の 3 点を重視した。

* 予算の設定：食材費を一人 1 食 0.5 ドル、月に 60 食 20 日間で 600 ドルという予算を立て、その半額 300 ドルを助成金で残り半分は保護者からの集金と作物寄付で賄う。

* 支援期間（1 年間）の設定：期間中上記助成金、事業責任者と栄養士の二人の支援が入る。

* 調査の実施：全世帯への社会調査、食事調査の実施による地域の困難の要因と強みの理解。

4. 事業の経過

2024 年 3 月に教育局、5 月に HF 校校長に事業の説明をし、積極的な同意を得た。その後新年度に保護者向けの事業説明会を行い、目標と活

動内容を共有した。保護者らは、栄養知識の不足に不安はあるものの、事業への意欲を表明した。調理室、調理器具、食堂などの確認と改善を毎月の給食委員会で話し合いながら行った。こうしたインフラは、責任を持って管理する主体がない状態であり、状況把握も難しかったが、寄付や別の助成金などで対応して最低限のインフラを整えた。並行して、食事調査結果や国の基準を参考にレシピ作り上げ、12月中旬に助成金（月300ドル）を投入した給食が始まった。

開始後、困難を極めたのが食材調達である。近くに店がない、値段が不確定、材料を仕入れた食材を計る、計算する、記録する、などなど全てが新しいことであり、36家庭の親たちが2名ずつ交代で調理に来るので、全員がそのやり方を学ぶ必要がある。委員会の主導で全員対象の講習会が開かれた。こうしてさらに2ヶ月が経ち、2025年6月に筆者がHF校に訪れた時、学校の動きは以前とは見違えるものになっていた。特徴的であったのは以下の3点である。括弧内は保護者自身の言葉である。

＊学校給食委員会が有効に活動できている。

（自分で考えるようになった。必要な栄養知識がわかった。）

＊食材調達の方法を保護者の力で解決、調理プロセスと新メニューを理解し実践していた。

＊子どもが親を変えていた（息子は今ではよく食べるようになり、授業中寝なくなった、お腹も空かなくなったと言っています。いつも「調理シフトを忘れないでね」、「学校のメニューを家でも作って」と言います。）

現在まだ支援期間中だが、給食は保護者だけでも順調に提供できており、寄付提供者も出てきて終了後の継続の見通しも立ってきている。

5. まとめ

保護者と教師の力に依拠して、子どもの栄養改善のために学校給食を基盤から作るという試みを1年間という限定された期間の中でやり遂げるというこれまでにない経験をしている。栄養的に考察された食事を適切に子どもに提供する試みは、自分たちが生活している環境につい

て改めて見直すきっかけを作り、議論を重ね、経験を積み、たくさんの気づきを生み出した。栄養士は伝統的な食事という観点からもレシピの見直しをしてきたが、同時に保護者からも「伝統的な食事は維持してきましたが、子どもたちが十分な栄養を摂れていないことに気づいていませんでした」という感想が寄せられている。

異文化間二言語教育の視点から見ると、受田は「経済基盤が脆弱であり移住のため過疎化が進行しているコミュニティにおいては、先住民言語が若年層に伝達されるのは困難であろう」

[2007]と述べているが、まさにHF校のあるサンパブロウルコも同様の状況である。このような状況において、すべての保護者が一つの目的に向かって子どものために動く中で成果が出てきて、第3の軸の、外部の関心をも引くようになった。この過程で改めて自らの伝統性に誇りを感じ、この地域にこれからも住み続けたいという保護者の言葉となって現れている。これが過疎化への歯止めとなるのかどうかはまだ未知であるが、持続可能な給食実施のモデルをつくるというこの事業が、これまで学校を中心にまともってきた伝統的な地域の力を改めて意識させ、地域発展につなぐ可能性を筆者は見ている。

【主要参考文献】

受田宏之、2007、「先住民二言語教育の理想と現実」、『貧困の克服と教育発展：メキシコとブラジルの事例研究』、米村明夫編、pp.125-177、明石書店。

杉田優子、2010、「先住民女性リーダー、トランシトはかなわぬ夢を語ったのか：エクアドル、シエラノルテ、カヤンベにおける地域変動と教育の役割」、『イベロアメリカ研究』、31(2):87-102。

WFP、2024、「国連 WFP による地産地消の学校給食が、エクアドル農村部に栄養を届けるまで」。 <https://ja.wfp.org/stories/how-wfps-home-grown-school-feeding-takes-nutrition-rural-areas-ecuador>（最終アクセス 2025/10/30）

南米ラクダ科動物の毛色・模様分類と品質改良：ペルー南部の事例

鳥塚あゆち（青山学院大学）

キーワード： ペルー南部高地、南米ラクダ科動物、毛色・模様の民俗名称、品質改良

Clasificación de los colores y distribución de manchas en camélidos sudamericanos: el caso del sur de Perú

Ayuchi TORITSUKA (Aoyama Gakuin University)

Keywords: *sierra sur de Perú, camélidos sudamericanos, denominación indígena, mejoramiento de fibra de alpaca*

本報告では、2023～2024 年に実施したリヤマ・アルパカの毛色・模様名称調査の結果を示し、牧民共同体における家畜の品質改良の現状と問題について述べた。

南米ラクダ科家畜のリヤマとアルパカは、多様な方法で利用される。とくにアルパカの良質な毛は衣服の材料として古くから利用され、国際的にも高く評価されている。ペルーでは 1960 年代からこれらの品質改良が推し進められ、90 年代には牧民共同体にも波及した。アルパカを中心に推進された改良は、国際市場で価値の高い白色単色で良質の毛を生産するためであり、結果、群れの「白色化」が進んだ。

他方で、毛色の多様性の喪失、有色個体数の減少、リヤマの重要性の低下という弊害も招いた。この多様性減退の危機に対し、ペルーでは有色個体回復のためのプロジェクトが実施された [鳥塚 2025]。その目的には、アンデスにおける生物多様性の保護、持続可能な家畜管理の推進、生産者の貧困の解消などが挙げられ、早くは 1980 年代後半から交配実験や遺伝子管理が開始されていた。しかしながら、報告者の調査地であるクスコ県の共同体ワイリヤワイリヤでは、品質改良の導入から 30 年ほど群れの「白色化」が継続され、2017 年の調査でもその傾向に大きな変化は見られなかった。

市場価値の高い白色個体の飼養を推進することは生産者の経済的利益の面では合理的かもしれないが、市場の原理を押し付けつつ他方で色の多様性を回復しようとする国家のやり方は矛

盾してはいないか。上記プロジェクトでは牧民の伝統知への評価も目的に掲げられたが、ワイリヤワイリヤの人々は有色個体の喪失に伴いケチュア語での色名称を忘れつつあった。

南米ラクダ科動物の毛色は白・灰・茶・黒を基本色とし、色調は 22 色ほどであるという。これらの天然色は、アルパカの品評会では白色以外は「有色」に分類され、その別は重視されない。繊維企業では、染色後の毛も含めて記号で識別され、流行色も生み出される。織物や工芸品の製作者は、企業が提供する色見本から必要な紡糸を購入することになる。無論、牧民は家畜の毛色を区別しているし、記号で呼ぶことはない。

毛色および模様の民俗名称を最も詳細に記録しているのは Flores Ochoa [1981] であり、基本色は白・灰・茶・黒など 7 色、色調は白灰・黒灰・白茶・赤茶など 19 に分類されている。模様は、たとえば、明色を基調としそこに暗色の斑がある *alqa* と呼ばれるグループに 26 種のバリエーションがあるほか、明色を基調として頭か首に暗色の斑があるグループ、四肢に特徴があるグループなど 36 種が数えられている。

報告者の調査では、10 名の成員から毛色・模様名称の聞き取りを行うことができた。リヤマとアルパカで異なる名称をもつ模様もあるとのことだが、基本的には同名称で呼ぶという。

色の名称には、*yuraq* (白)、*wicuña paqo* (淡黄)、*q'ello* (黄、淡黄)、*khurusa* (栗)、*oqhe* (灰)、*paqo* あるいは *ñaku* (ビクーニャ)、*mosq'o* (薄茶)、*chumpi* (茶)、*puka chumpi* (赤茶)、*yawar chumpi*

(濃茶)、*yana* (黒) の 11 種が挙げられた。茶色のバリエーションが多いことがわかる。*khurusa* という色は Flores Ochoa も採録していて、栗色 (*castaño*) と説明している。成員によると単色ではなく茶に白が混じる色で、顔が白色とのことであった (図 1)。



図 1 アルパカ、*khurusa*

模様は、体色が白色と有色で半々になる *alqa*、頭部のみ白色の *ahuya*、臀部のみ有色の *ch'inque*、頸部のみ白色の *condori*、肩 (頸部の付け根) のみ白色の *tullumpi*、全体に複数の斑が広がる *moro*、頭部と臀部が黒色でそれ以外は白色・淡色の *wallata* (図 2)、頭部のみ黒色でそれ以外は白色・淡色の *quewayllo*、頭部が茶色で頸の上部が淡色で胴部は暗色の *qage* が採録できた。他にも、体の一部のみ有色のものは、その部分を表すケチュア語と色名称を組み合わせて名付けが行われていた (ex. *yanasenqa* : 黒鼻)。



図 2 アルパカ、*wallata*

このうち、*condori*、*wallata*、*quewayllo*、*qage* は高地で見られるトリの模様から命名されている。先行研究では、雨季に現れる特定のトリが家畜の出産を知らせる徴であると考えられるため、豊穡を象徴する名称だと考察されている [Palacios Ríos 2000]。ワイリャワイリャでも同

様の意味をもつのかを考察するには、成員にとってそれぞれのトリがどのような存在なのかを調査する必要があるだろう。

当該共同体では、現在でも白色単色への品質改良を継続しており、クスコ行政付属の機関でも白色化を推進している。一部の牧民は、価値の上昇を期待して有色個体を回復しつつあるものの、毛の品質は白色には及んでいない。

聞き取りからは、成員に多様性志向は存在したが経済的利益を求めて白色への改良を選択したことが明らかとなった。人々は、時代の変化のなかで生存に必要な戦略として改良活動に取り組んできたと言える。しかしながら、若年層は共同体で家畜を飼う生活に関心を失っており、品質改良の継続は困難な状況にある。アルパカに図 2 のような模様が現れるのは、改良がうまく継続されていない証拠なのである。市場主義が求めた画一的管理は、決して成功したとは言えないだろう。

現地調査では、約 10 の体色名称と約 15 の模様名称を採録でき、その一部は Flores Ochoa の記録と同名称であった。また名付けの根拠に自然との関わりが確認できた。このような民俗名称からは、牧民は市場が求める「繊維」を飼っているわけではないことが明示される。

【主要参考文献】

- Flores Ochoa, Jorge A., 1981, Clasificación y nominación de camélidos sudamericanos. En *La tecnología en el mundo andino*, Heather Lechtman y Ana María Soldi (eds.), Tomo1, Serie Antropológica 36, pp.195-215, Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Palacios Ríos, Félix, 2000, El simbolismo de las alpacas: Ritual y cosmovisión andina. En *Pastoreo altoandino: Realidad, sacralidad y posibilidades*, Jorge A. Flores Ochoa y Yoshiki Kobayashi (eds.), pp.189-199, Plural, La Paz.
- 鳥塚あゆみ、2025、「ペルーにおけるアルパカの白色化と有色個体の回復」、『*Aoyama Journal of International Studies*』(12) : 113-121. DOI: <https://doi.org/10.34321/TF02032788>

大地信仰と互酬制に関して

岡本年正（帝京大学）

キーワード： パチャママ、大地信仰、互酬制、負債、関係性

The Interrelations Between Earth Beliefs and Reciprocity in Cuzco, Perú

Toshimasa OKAMOTO (Teikyo University)

Keywords: Pachamama, Earth beliefs, reciprocity, debt, relationship

1. はじめに

本発表の目的は、これまでアンデス地域全般の信仰として普遍的に描かれてきた大地信仰が、互酬制の視点と地方都市クスコにおける現代的な文脈から分析されることで、複層的な状況にあることを明確にすることである。

これまでの分析により、大地信仰において最重要神格であり、大地と同義として認識されているパチャママは、それぞれの人の立場（個人的だけでなく周辺の環境も含む）によって異なる認識をされていることがわかってきた。

さまざまな立場からの複数の認識の仕方はあるが、人々とパチャママ（大地）の関係として共通している点は、人々は供物を捧げて請願する、そしてそれに対して何かしらの利益をパチャママから受け取っていると考える点である。ここにおいて、パチャママと様々な立場にある人々の関係それぞれを、アンデスに広くみられる互酬の視点から分析する。

2. 供物（ofrenda = despacho）を介したパチャママと人々の関係：アンデス世界における互酬制

アンデス世界では、人々の生活の中に様々な互酬的關係が存在している。例えばアイニ（*ayni*）についてキャサリン・アレンは「生活はアイニの周りで回っている。何もタダではなされない。アイニにおいて、すべての行為は同等の反応を引き起こす」[Allen 2002:92]と述べている。アイニは基本的には社会的に同等の者同士で同等の労働を交換するものである。とはいえ、実際は相当程度の不平等を含むことも指摘されている

[Leinaweaver 2018:237]。またアイニとは異なり不均衡な人間関係を含み、労働に対して食事を提供するミンカ（*mink'a*）も良く知られている[Allen 2002:72-73]。

人々の間にある互酬的關係は、供物と大地の恵みを通して、アンデスの人々と大地あるいはパチャママにも敷衍されうる。人々と大地（パチャママ）の関係は、不均衡な互酬制といえる。自然の状況により農作物の収穫量や家畜の多産・不妊は左右され、常に大地から一定量の恵みを得られるわけではない。その一方、アンデスに生きる人々は、基本的には毎年同量の供物を捧げる。ここにおいて大地と共にある人々は、この互酬にどこまで期待しているのかわからない、むしろ期待しない互酬といえる。彼らは大地からの恵みを確実にするというよりも、その手前にある、大地との関係を続けるため、つまり共にあり続けるために供物を捧げているといえる。

一方、大地との関係を直接的に持たず、市場経済的な意味でパチャママと互酬的な関係を持つ人々もいる。むしろ彼らが、現在の都市部も含めてパチャママ信仰を活性化させている。

彼らとパチャママの間の供物は、貨幣の比喻のような形として存在する。人々はパチャママに対し、即自的かつ平等的な交換を求めている。その結果、彼らの備える供物は大きくなり、供物そのものの値段も膨らんでいっている。供物の量が増えるのは、一つ一つの要素が増えているだけでなく、新たな要素も加わってきているためである。それらはやみくもに増えているわけではなく、パチャママが好むと思われるものが加えられている。この点においては、大地と直接

かかわらない人々も、パチャママを主体としてとらえているだろう。

一方で、彼らの関係性の形は個人対パチャママであり 2 者関係で閉じてしまう。アンデスで生きるということが、パチャママと共にあり続けることであるならば、2 者関係ではなく、少なくとも時間を含めた、世代を超えた人々とパチャママの関係でなくてはならない。その意味で、大地と直接かかわる人々とそうでない人々のパチャママとの関係は異なっており、同じような互酬という関係ではない。

3. 互酬制を超えて：関係の継続から

大地とかかわる人々は、大地と互酬による関係ではなく、関係がそもそもあり、その関係の継続のため、互酬のような形式をとっているのではないか。この点を、負債から分析することで、互酬という形式の目的が単に大地の恵み、もしくはパチャママに願いをかなえてもらうこと以前に、パチャママとの関係を維持することが目指されていることを考察する。

この関係性という観点から論じるため、負債が人々とパチャママの関係を捉える視点となりうる。負債を積極的に捉える視点は、グレーバーや、グレーバーをもとに、関係性の継続や時間の問題を含めた負債についての議論が参考となる [Cf. グレーバー 2016, 佐久間他 2023]。

パチャママへの供物に関し Mannheim は「山の神々への儀礼の供物は、肥沃な土地と家畜の反対給付への要求であるマニヤイ (*mañay*) がしばしば伴われている」と述べる。マニヤイは、反対給付を遅れて受け取る給付であるとしている [Mannheim 1986:268]。遅れることにより、負債が発生し関係の継続が考えられる。また、そもそもここでの給付と反対給付の大きさの均衡は、計ることはできない。マニヤイが、請願の他に祈るという計りえないことも意味していることから、パチャママとの関係性は、即自的かつ均衡のある関係とは考えにくい。つまりは常に負債を作り続ける関係であるともいえる。

一方で、先述のように大地と直接かかわりのない人々とパチャママの関係は、即自的かつ彼

らの考える均衡の上（供物を大きくすれば大きな願いも叶う）に成立しており、負債を発生させない（感じない）仕組みといえる。

しかしながら彼らの中には、パチャママに対する供物をパゴ（スペイン語で支払いの意）と呼びつつも、「支払い」ではなく「感謝」であると説明する人は多い。ここには、交換だけでない関係性も常に存在しており、交換か互酬かといった二者択一の世界が存在しているわけではない。

4. おわりに

パチャママに供物を行うことは、大地と直接関係を持つか持たないかにより、その性質が異なっている。一方で交換的であり、他方でより贈与的な互酬制の関係が存在している。それらの混交状況が都市、そして都市に生きる人々の中に存在していることが明らかとなった。また、パチャママと人々の関係が伝統や慣習として、つまり世代を超えてつながり続けるために供物があり、サルトゥー＝ラジュが述べる「借りの正の側面」[サルトゥー＝ラジュ 2014:209-211] がそこには存在している。

【主要参考文献】

Allen, Catherine J., 2002, *The Hold Life Has: Coca and Cultural Identity in an Andean Community* (2nd edition). Smithsonian Institution Press, Washington D.C.

グレーバー、デヴィッド、2016、『負債論：負債と暴力の 5000 年』、以文社。

Leinaweaver, Jessaca B., 2018, Kinship, Households, and Sociality. In *The Andean World*, edited by Linda J. Seligmann, and Kathleen S. Fine-Dare, pp.235-248, Routledge, Abingdon, Oxon. DOI: <https://doi.org/10.4324/9781315621715>

Mannheim, Bruce, 1986, The Language of Reciprocity in Southern Peruvian Quechua. *Anthropological Linguistics*, 28(3):267-273.

佐久間寛他編著、2023、『負債と信用の人類学：人間経済の現在』、以文社。

サルトゥー＝ラジュ、ナタリー、2014、『借りの哲学』、太田出版。

アラゴン連合王国：インカの自称「タワンティンスユ」の源泉

大平秀一（東海大学）

キーワード： アンデス、先住民史、「インカ帝国」、クアトロ・バラス、クロニカ（年代記）

Corona de Aragón: el origen del nombre “Tahuantinsuyu”

Shuichi ODAIRA (Tokai University)

Keywords: Andes, Historia de nativos, “Inca Empire”, Cuatro barras (varas), Crónica

スペイン侵入以前のアンデス先住民は、文字をもたなかった。1532年、ピサロ率いる自称「征服者」らのペルー上陸以後、彼らはスペインの支配下におかれた。その過程で、先住民社会・文化・歴史は、他者・スペイン人により書き残された。

ピサロらが出会った先住民の王・社会は、「インカ（インガ）」と表象された。強大な王権で統率されたように描かれるその社会は、後に「インカ帝国」と書き表わされ、その名は現代に継承されている。さらに16世紀後半には、「タワンティンスユ（スユ）」という別称も示され、それがインカ国家の自称・史実と捉えられて理論化も図られてきた [cf. Urton et al. ed. 2017]。本発表では、この自称の源泉が Corona de Aragón（アラゴン連合王国）の別称にあることを指摘した。

「タワンティンスユ」（Tahuantinsuyu）は、ケチュア語で「4つのスユ（細長い区画）」を意味し、インカを構成する4つの地方の意と解釈されてきた。この「スユ/スヨ（suyu/suyo）」という語は、1534年の Sancho de la Hoz の記録にすでにみてとれ、「……キト方面の土地をカンカスエティオ(Cancasuetio)、コリャオというその先の地方をコリャスヨ(Collasuyo)、海岸部をコンディスヨ(Condisuyo)、奥の方をコンダスヨ(Condasuyo)と呼んでいた。このように、領地を区切る十字架のような形になったこれら4つの地方に名前を付けていた」とある。征服直後で詳細が不明瞭だったにもかかわらず、4つの部分からなるというインカ国家の姿が当初から述べられている。示し合わせたかのように、1530年代の大半の記録ではこの「スユ」に言及しているものの、ペルー上陸から39年間、「タワンティンスユ」という名称は、いかなるクロニカでも言及されていない。

その名称が最初に示されたのは、Juan Polo de Ondegaldo の記録 (*Informaciones acerca de la religión y gobierno de los incas* [1571]) である。そこには、「……これらのインディオの暮らし方では、すべての王国が4つに分けられ、そのそれぞれに uno (1つ) と呼ばれる1万人のインディオがいて、これらのそれぞれにはカシケ、首長、専横者の上に1人の統治者がおり、さらに別の捉え方ではこれらをタワンティンスヨと呼んだことが明らかである。これは4つの部分を意味し、そのようにすべての王国が分けられていた。それらはコルカ・スヨ(colca suyo)、シンチャ・スヨ(zincha suyo)、アンデ・スヨ(ande suyo)、インデ・スヨ(inde suyo)である。この分割はクスコから始まっており、ワカ（信仰と関わる場所・もの）の地図にあるように、そこからそれぞれこれらの部分に向かう4本の道が発している……」とある。

Juan de Betanzos (1551) や Cieza de León (1553) は、4つの地方としてチンチャスヨ、コンデスヨ、コリャスヨ、アンデスヨを挙げ、後の記録や辞書にも影響を与えている。どういうわけか Polo は、これに改変を図ったものの継承されず、研究者の解釈も Betanzos らの記述を基になされている。

“suyu”（スユ）は、1560年の Santo Tomás のケチュア語ースペイン語辞書にすでに収録されている。そこでは、「紋章のような一部分」(Parte assi diuisa) と説明され、「部分に分けること」や人々の（あるいは軍事）パレード等の関連語が示されている。Diego de Torres Rubio の辞書 (1584) では、“suyu”を「縞（ストライプ）」とし、“suyuni”には「土地、畑等を分けること」とある。これ以外に「一部分」として Hanan suyu（上スユ）と Hurin suyu（下スユ）を示し、Tawantinsuyu に加

えて、*Chinchaysuyu*、*Collasuyu*、*Cuntisuyu* という 3 つの地方名も挙げている。González Holguín の辞書 (1608) では、さらに多くの関連語が示され、織物の帯状紋様も含まれている。民族誌を考慮に入れると、“suyu”には畑の区画や織物の帯状紋様等「細長い区画・様態」という観念が共通している。1570 年の裁判記録では、コチャバンバにおけるインカの畑地の細長い区分け・単位にこの語が使用されている。しかし、文化の継承性の強いアンデスにおいて、村・共同体の構成単位に“suyu”を用いる事例はなく、この語を冠したインカ国家の自称は極めて異質・不自然でもある。

こうした中、16 世紀のイベリア半島において、「タワンティンスユ」と同じ意味をもつ社会名称が存在したことは着目されてよい。それは、よく知られたアラゴン連合王国の別称である。

アラゴン連合王国は、アラゴン王ラミロ 2 世の一人娘パルネリャとバルセロナ伯ラモン・バランゲー 4 世の婚約 (1137) を機に成立する。その紋章は、(1) ソブラルベの十字架、(2) イニゴ・アリスタの十字架、(3) アルコラスの十字架<4 人のモーロ人王の首級> (以上、パンプローナ王国、アラゴン王国等の伝承と関連する図像)、そして (4) 黄金色地上の 4 本の赤いストライプ (バルセロナ伯 [領]・カタルーニャ君主国の紋章) からなり、(1) を伴わない場合もある。

それぞれの紋章・図像の要素は、硬貨、封蝋 (印章)、建築や棺の装飾、彩画・版画等を通して 11～13 世紀以後に確認できる。これらの中で、アラゴン連合王国のシンボルと化していったのが (4) である。カルロス 1 世の葬列の図 (1559) では、*Aragón* の名の下で先導者がこの旗を掲げ、馬もその装飾に覆われている。その紋章の要素は、カトリック両王やエスパーニャの紋章のほか、同連合王国を構成するバレンシア王国やマヨルカ王国等の紋章にも組み込まれ、現代の「サニェーラ」(*Senyera* / *Señera*) に継承されている。

この 4 本の赤いストライプの由来は、1551 年の Pere Antoni Beuter の著作の中で、ノルマン人との抗争に際し、フランスのルイ王 (敬虔王) がバルセロナのギフレ多毛伯 (Iofre Velloso [Guifré el Pilós / Wifredo el Velloso]) の傷の血に手を浸し、

無地の黄金色の盾に 4 本の指で上から下にこすり付けたと記されている。ただしこれは後の創出と解釈されており、実際の由来は不明瞭である。上記の逸話の記述頁にはその紋章も図示され、「カタルーニャの紋章 黄金色の空間に血の *Cuatro Barras* が Iofre Velloso 伯爵に与えられた」という注書きがある [Beuter 1551:cap.13]。

この紋章は *Cuatro Barras* と称され、その名はアラゴン連合王国を指しても用いられていた。アラゴン史では、基礎的用語の一つでもある。*cuatro* はスペイン語で「4」そして *barra* (=vara) は槍・杖・棒など細長いものを意味する。これをケチュア語で捉えると、まさに「タワンティンスユ」と訳し得る。Santo Tomás の辞書の「紋章のような一部分」という説明は、おそらく *Cuatro Barras* がイメージされていたのだろう。

「タワンティンスユ」という名称を最初に創出・提示した Polo de Ondegardo (c.1520-1575) は、スペイン北部のバリャドリ市出身で、マヨール広場周辺に住まい、同市の Colegio de Santa Cruz で法学を学んでいる。1543 年 11 月にスペインを発ち、翌 1544 年 3 月にペルーのトゥンベスに到っている。バリャドリは *Cuatro Barras* の中心領域の西方に位置し、彼がアラゴン連合王国の情報に通じていたことは疑問の余地がない。クスコのコレヒドール (行政長官) も務めた Polo は、ケチュア語の知識もそれなりにあり、また前述した 1570 年の裁判の当事者でもあった。

無文字社会のクロニカ (年代記) の史料批判は、困難を極める。一方でインカに関する知識の 9 割以上は、クロニカに依拠するともいわれる。アンデス先住民史・インカの理解を深めるためには、多様な手法による史料批判が求められよう。

【主要参考文献】

- Beuter, Pere Antoni, 1551, *Segunda parte de la Coronica general de España, y especialmente de Aragon, Cathaluña y Valencia*. Ioan de Mey Flandro, Valencia.
- Urton, Gary, and Von Hagen, Adriana eds., 2015, *Encyclopedia of the Incas*. Rowman & Littlefield, Lanham. (アートン・ゲイリー他編、2024、『インカ百科事典』[大平秀一監訳]、柊風舎。)

ペルーアンデス中北部における植民地社会の形成：16 世紀カエホン・デ・ワイラスのスペイン人と先住民

真鍋周三（兵庫県立大学）

キーワード： カエホン・デ・ワイラス、エンコミエンダ、貢納、巡察、査定

La formación de la sociedad colonial en el norte-centro de los Andes peruanos: Españoles e indígenas en Callejón de Huaylas del siglo XVI

Shuzo MANABE (University of Hyogo)

Keywords: *Callejón de Huaylas, encomienda, tributo, visita, tasa*

1. はじめに

新大陸の植民地化は、先住民からの租税徴収によってスペイン王権に巨富をもたらす。その最たるものが貢納であった。貢納対象者は 18 歳から 50 歳までの先住民成年男子であり、16 世紀初期、貢納徴収は一般的にはエンコメンデーロに委託された。貢納徴収に先だって「巡察」「査定」が行われ、対象者の人口が把握された。

現アンカシュ県の山岳地方、サンタ川流域一帯は地理的には「カエホン・デ・ワイラス」と呼ばれる。自然資源に富み、歴史的には「ワイラス地方」として知られた。報告では、このワイラス地域を中心にとり上げ、標記のテーマを考察した。

2. スペイン人征服者とカエホン・デ・ワイラス

カエホン・デ・ワイラスは、東側に 6,000m 級の氷雪の高峰が連なるコルディエラ・ブランカ、西側にコルディエラ・ネグラがあり、両山脈に挟まれた南北に延びる 3,000 メートル前後のサンタ川流域地帯が中心であった。

スペイン人征服者が到着した頃、ワイラス地域は 2 つのエリアからなった。南部の「ルリングアイラス」と北部の「アナングアイラス」である。ルリングアイラスに 6,000 人、アナングアイラスに 6,000 人の先住民成年男子人口が存在していた。

ワイラスには 2 人のエリート先住民女性がいた。アニャス・コルケとコンタルワチョである。両者の共通点は、共にインカ王ワイナ・カパック

の側室となったことである。コンタルワチョを母として誕生したのがイネス・ワイラス・ユパンキ（1518-59）であった。

数年後、数奇な運命が訪れる。1532 年 11 月アタワルパ王が捕囚となった際、イネス・ワイラスはカハマルカに出向き異母兄弟のアタワルパ王に面会した。そこで、フランシスコ・ピサロ（「F. ピサロ」と略称）とも会見する。翌 1533 年、F. ピサロは彼女を見初め二人は結ばれる。1533 年のクスコ征服に同行。翌 1534 年長女フランシスカ・ピサロ（1534-98）が誕生した。

「身代金」集めの一環で、1533 年 1 月 11 日、F. ピサロの指示により財宝探索隊がカハマルカから、インカの聖所パチャカマック（今日のリマ南方に位置）に派遣される。パチャカマック神殿に置かれていた財宝を奪い、それをカハマルカに持ち帰るのが目的であった。往路で一行はカエホン・デ・ワイラスを通過した。

復路は東に向かい、中央アンデスを横断してハウハ谷に到着。そこから山岳部を通過して、同年 5 月カハマルカに戻る。

1533 年 8 月 11 日、F. ピサロ率いる征服軍は、クスコに向けて出発。財宝探索隊が踏破したカエホン・デ・ワイラスを進むルートを通る。征服軍はハウハに基地を築き、クスコに向けて出発。11 月 15 日、クスコに侵攻。その後コリカンチャの財宝・貴金属類を略奪した。

1534 年 4 月 F. ピサロはハウハに戻る。そこでエンコミエンダの分配を決め実行する。

ルリングアイラスにおけるエンコミエンダは、配下の 2 人の騎士セバスティアン・デ・トーレ

スとヘロニモ・デ・アリアガに分配された。アナンガイラスは、F. ピサロ自身が受領。1535 年 1 月 F.ピサロはリマ市の建設に着手する。

3. 混乱の時代から植民地支配（王権による支配）へ

ワイラスの豊かさを示す好例。1536～37 年、マンコ・インカの反乱軍がリマ市を包囲したとき、コンタルワチョの対応は驚くべきもので、4,000 人の先住民兵を率いてワイラスからリマへ加勢に参じた。また大量の糧食をリマに運び兵站を担った。彼女のおかげでリマは守られた。

2 人の騎士に分配されたエンコミエンダについて、セバスティアン・デ・トーレスが得た場所は「ワラス」、ヘロニモ・デ・アリアガが得た場所は「レクアイ」であった。1539 年、エンコミエンダ内で起きた先住民反乱でセバスティアン・デ・トーレスは死亡する。息子のエルナンドは小児ゆえ、妻のフランシスカ・ヒメネス（エルナンドの母親）がエンコミエンダを継承。彼女は 1548 年に再婚（3 度目の結婚）する。相手はセビーリャ出身のスペイン人ルイ・バルバ。翌 1549 年、今度はフランシスカ・ヒメネスが死亡。夫のルイ・バルバが妻のエンコミエンダの相続を要求して紛争になった。裁判の結果、1549 年にルイ・バルバは 300 人の貢納対象者を擁するエンコメンデーロになった。エルナンドの義理の兄弟クリストーバルもまた、故セバスティアンのエンコミエンダの一部を継承。かくしてエルナンド・デ・トーレスの権利が侵害された。

1558 年 3 月時点でエルナンドには後見人がついていた。ワヌコのコレヒドールのディエゴ・デ・アルバレスである。この時、エルナンドは未成年でワヌコ市の住民であった。

1562 年エルナンドはワラスとマルカのエンコミエンダを回復するために訴訟を継続中であった。その後、第 5 代副王トレド（在位 1569–81）は、ワラスとマルカのエンコミエンダの所有をエルナンド・デ・トーレスに認める。

ワラスの巡察は 1558 年 1 月、ワヌコのコレヒドールにより行われた。

1549 年ペルー全般における貢納徴収体制に向

けての「査定」が、ペドロ・デ・ラ・ガスカにより始められる。ワイラスでは貢納納入用の農畜産品の大半を地元で調達できていた。

ワイラスにおける植民地支配の始まり。1571 年副王トレドはスペイン人巡察使サントーヨにレドゥクシオンを命じる。1576 年 3 月 30 日、副王トレドは、エンコミエンダを再調整した。ワイラス地方のエンコメンデーロの人数は、フランシスカ・ピサロを含めて「4 人」となった。

ワイラス全体の統治者としてコレヒドールが配置されることになり、1576 年 5 月 30 日ワイラスのコレヒミエントが誕生した。エンコミエンダとコレヒミエントの複合形式となる。

4. おわりに

カエホン・デ・ワイラスは類を見ないほど豊かな地帯であった。それゆえに、インカ王ワイナ・カパックやスペイン人征服者ピサロ、ひいてはスペイン王権が魅了されたのも無理からぬことであった。この地方ではエンコミエンダが核となって、植民地支配への扉が開いた。ワラス市が建設され、コレヒミエントが誕生した。

【主要参考文献】

- Alba Herrera, C. Augusto, 1996, *Huarás: Historia de un pueblo en transformación*. Ediciones “El Inca”, Caras-Ancash.
- Matos Colchado, Santiago, 2000, *Huaylas y Conchucos en la historia regional*. Editorial San Marcos, Lima.
- Varón Gabai, Rafael, 1980, *Curacas y encomenderos: Acomodamiento nativo en Huarás, siglos XVI-XVII*. P.L. Villanueva, Lima.
- Varón Gabai, Rafael, 1993, *Estrategias políticas y relaciones conyugales: El comportamiento de incas y españoles en Huaylas en la primera mitad del siglo XVI*. *Bulletin de l’Institut Français d’Études Andines*, Tome 22, No.3, pp.721-737.

アヤクチョの歌と踊りと Taki Oncoy について

佐々木直美（法政大学）

キーワード： タキ・オンコイ、アイラ、歌、踊り

Reconsideraciones de los canto, baile y Taki Oncoy

Naomi SASAKI (Hosei University)

Keywords: Taki Oncoy, ayra, canto (song), baile (dance)

タキ・オンコイは、人類学者ルイス・ミリョネスが1960年代にセビーリャのインディアス総文書館で出会った史料によって周知され、先住民による千年王国運動として多くの研究者から注目を浴びてきた。その史料とは、クリストバル・デ・アルボルノス司教が作成した3つの「業績調書 (*Informaciones de servicios*)」(以下「調書」)であり、ミリョネスはこれらの史料に書かれていたものをケチュア語で *taki onqoy* と綴り、スペイン語訳として *enfermedad del canto* と紹介した [Millones 1989; Millones (ed.) 1990]。ただし、史料の一部にタキ・オンコイの信奉者がアンデスの神格「ワカ」の憑依によって踊る、との記述があったことから、タキ・オンコイは「踊り病 (*enfermedad del baile*)」と呼ばれることが一般的となる。

1990年代には、タキ・オンコイを先住民による抵抗運動とする解釈に批判的な研究もでてくるが [Ramos 1992; 網野 1995]、依然としてこれを「抵抗」や「運動」と位置づける見方は学術的根拠とは別に一般的に人気がある。ペルーの伝統文化を語るうえでタキ・オンコイは強いインパクトを持ち続けており、先住民の抵抗を示す文化的シンボルとしてその言説と表象は再生産されている [Millones 2007:381-402]。

本発表は、ラモスや網野の指摘が十分説得力があるからこそタキ・オンコイはさらなる研究に値するとの立場から、史料・資料の再検討によってタキ・オンコイについて新たな解釈の可能性を提示した。

タキ・オンコイに言及するアルボルノスの「調書」は3つあり、1570年、1577年そして1584年

に書かれた。大変興味深いことにタキ・オンコイ初出の文書1570年の「調書」には「タキ・オンコイ、別名アイラ (*aira*)」と繰り返し記されている。本発表では、この別名 *aira* に注目した。ケチュア語で類似する語として *ayla* と *qayra* について言及したうえで、アヤクチョ地方の家畜の繁殖儀礼で歌われる歌 *ayra* と関係する可能性を述べた。アイラがアヤクチョ地方で歌と踊りに関わることを確認できたため、さらに *ayra* の事例を収集し分析することは今後の研究課題とする。

また、2つ目の問題提起としてタキ・オンコイの表記のブレを本発表では指摘した。3つの「調書」は、アルボルノスが召喚したスペイン人証人の証言を公証人が記したものであるため、アルボルノス自身が一人で筆を執ったものではないことを念頭においても、「調書」内のブレ、さらには元々の表記の「ちょっとした違い」は再考に値することを示した。「調書」内の表記の具体的な違いについては、(表1)の通りである。ほぼ同時代にタキ・オンコイに言及したポロ [Polo 1917[1571]]、ポマ [Guaman Poma 1615:282[280], 690[676]] そしてモリーナ [Molina 2010[1575]] の記述と16-17世紀のケチュア語の辞書における「タキ」と「オンコイ」を参照し、「タキ」は「踊り」以上に「歌」が主要な意味であること、「オンコイ」においては当時の辞書において「病」を意味することが確認できたが、史料のなかでは「y」の脱落が多く確認できることを指摘し、その信奉者を *taquiongo* と造語のように使用している事例を確認した。本発表ではインディアス総文書館から史料を取り寄せ手稿を確認したと

ころ、ongo と書かれているものに接続詞 y が続いているが、活字版では2語が統合されて ongoy と改められている可能性について指摘した。手稿全体を確認する作業は今後の課題とする。

	1570	1577	1584
Taqui Ongoy, y por otro nombre Aira	1		
Taqui Ongoy, y por otro nombre Aira (Ayra)	3		
Taqui Ongoy, por otro nombre Aira	1		
Taqui Ongoy, que por otro nombre se dize Aira / Taquiongo, que por otro nombre se llama Aira	(14/3) 17		
Taqui Hongoy, que por otro nombre se dize Aira	1		
Aira Taqui Ongoy, que ...	2		
Aira e Taquiongo / Taqui Ongoy e Aira	2		
hazer el Taqui Ongoy tan publica		1	
Taqui Ongoy, que es la		1	
Taquiongo, a que lo castigarse...		1	
Taqui Ongoy, que en los dichos...		3	
Taqui Ongoy, y el fundamento		1	
Taqui Ongoy, en la qual		1	
Taquiongo, (en) la/lo...			6
Taquiongo que....			1
Taquiongo, donde los naturales bailaban			1
☆ baile, bailando, bailavan			5

表1 アルボルノスによる各年の「調書」に記された「タキ・オンコイ」の具体的表記とその回数
☆は「踊る」という表記

【主要参考文献】

Gonzales Holguín, Diego, 1989[1608], *Vocabulario*

de la Lengua General de todo el Perú llamada Lengua Qquichua o del Inca. Universidad Mayor de San Marcos, Lima.

Guamán Poma de Ayala, Felipe, 2001[1615], *El primer nueva crónica y buen gobierno*. <https://poma.kb.dk/permalink/2006/poma/info/en/frontpage.htm>

Landa, Ladislao, 2018, *Mesianismo y utopía en America: Perú, siglo XVI*. Yolanda Carlessi, Lima.

Millones (ed.), Luis, 1990, *El Retorno de las huacas Estudios y documentos del siglo XVI*. IEP, Lima.

Millones, Luis, 1989, *Mesianismo e idolatría en los Andes Centrales*. Editorial Biblos, Buenos Aires.

Millones, Luis, 2007, *Taki onqoy: de la enfermedad del canto a la epidemia*. Centro de investigaciones Diego Barros Arana, Santiago.

Molina, Cristóbal de, 2010[1575], *Relación de las fábulas y ritos de los incas*. Edición crítica de Paloma Jiménez del Campo, transcripción paleográfica de Paloma Cuenca Muñoz, Iberoamericana/Vervuert, Madrid.

Polo de Ondegardo, Juan, 1917[1571], *Informaciones acerca de la religión y gobierno de los incas: seguidas de las instrucciones de los Concilios de Lima (1ª parte) y del estado... (2ª parte)*. San Martí. <http://simurg.csic.es/view/990000128800204201>

Ramos, Gabriela, 1992, Política eclesiástica y extirpación de la idolatría: discursos y silencios en torno al Taqui Onqoy. *Revista Andina*, año.10, no.1, pp.147-169.

Santo Tomás, Domingo de. 2011[1560], *Lexicon, o Vocabulario de la lengua general del Perú*. <https://archive.org/details/lexiconovocabula00do> [mi](https://archive.org/details/lexiconovocabula00do)

網野徹哉、1995、「植民地体制とインディオ社会：アンデス植民地社会の一断面」、『近代世界への道：変容と摩擦』、歴史学研究会編、pp.127-157、東京大学出版会。

樹木に現れたキリストの顛末：アンデス世界の民衆カトリシズム

加藤隆浩

キーワード： 民衆カトリシズム、クスコ、イエスキリスト、ペルー

Details of Appearance of Jesus in the Andean World

Takahiro KATO

Keywords: Popular Catholicism, Cusco, Christ, Peru

カトリック世界ではしばしば岩窟や樹木などにキリスト・マリア・聖人が「出現」する。ペルー南部も例外ではなく、コイヨルリティ、ワンカなどはその発現の場がのちに世界的な巡礼地になったし、トレチャヨックの主やモリエチャヨックの主などは地域の守護神として根強い信仰を獲得している。

では、姿を現したこれらの「聖なるもの」は、その後どのような道筋を経て信仰体系を確立したのか、あるいは消滅の憂き目を辿ったのか、その変遷のプロセスをいったいどのように理解したらよいか問題となる。

ペルー南部では聖なるものの出現という現象が比較的頻繁に生起しているが、従来の研究の動向は、コイヨルリティ、ワンカ、コパカーナ等の著名な事例ばかりに視線が注がれ、世界的な巡礼地にはなりえなかった聖なるもの、短命に終わった聖なるものの出現についての解析は、残念ながらいまだ極めて限定的というしかない。しかも、先述のこれまでに研究が蓄積されてきた聖なるもの—たとえばコイヨルリティーは、植民地時代かそれに近い時代の現象であり、研究が依拠する文書は教会の内部文書として存在するが、それだけでは具体的な信者の動きや考え、思考が見えにくい。ましてや信者の側に立ち、信者の主張や信仰の成立過程を見ようとする、教会側からの文書からだけでは生き生きとした描写を望むべくもない。

しかし、扱う対象が近年のものあるいは割合に新しい事例なら、それは比較的容易に検証できる。なぜなら、近年の事例であれば、聖なるものの出現、変貌、そのプロセスの渦中にあった人

がおり、問題の宗教現象を直接見聞してはいなくても、祖父母、親、友人らからその体験談を繰り返し聞く機会を持った人がいる場合も少なくないからである。

そこで本発表では、ペルー共和国南部クスコ市ならびにその周辺で比較的最近発生し、その発生時から今日までの経緯を語れるインフォーマントの証言をもとに 4 つの事例—A セニョール・デ・ウィンピリヤイ（以下、SW）、B キリスト・デ・イスクチャカ（以下、CI）、C セニョール・デ・チェクタカカ（以下、SC）、D セニョール・デ・ホチュウルホ（以下、SJ）—を取りあげる。本発表で取り上げる資料は 1990 年以降発表者が現地調査を行い収集したものである。

現地調査で得た 4 つの資料を比較すると、どれも一様にイエスキリストの奇跡的出現として民衆の爆発的熱狂が見られる。しかし、A から D まで、つまり SW、CI、SC、SJ への熱狂ぶりが日を追うごとに変化する。たとえば SW には SW 友の会が組織されクスコの司教に直接面談しカトリック教会の公認を求めるまでに先鋭化した。今では SW 駅のバスターミナルのとなりに、礼拝堂を構え、クルスベラクイには多くの参拝者が詰めかける。複数のカルゴ集団が機能しており、ダンスチームも出てきている。SC は 1986 年のクスコ地震でできた大きな岩の裂け目に老婆がイエス出現の啓示からその絵姿を発見したことを発端に、爆発的な参拝現象が始まった。日に日に信者が増大し、献金を集めて出現の場を聖地とし、そこに宿泊施設を整備し一大巡礼地にしようという計画案作成まで話は膨らんだ。しかし献金の不正流用が発覚したのを契機に参

拝の熱気は一挙に冷えた。現在は、洞穴近くの崖の中腹にかけられた大きなカルバリオになり、熱狂的な信仰を集めている。

CI の場合は、盗まれたイエスキリストの絵画とまったく同じ顔のイエスがカプリの木に現れ、そこにブリキ製のイエスの顔をはめ込んだものがご神体となっている。これは信徒の前に姿を見せた神の姿を写し、聖なる出現の記憶を永続化するとともにそれを拡大・普及しようとするものであった。しかし今は畑の脇にキリストの顔をつけたカプリの木が一本だけ立っている。地元住民の認知度は低い。ただし、かつては熱狂的な信仰を受けていたし、様々な逸話も知られている。SJ は 2001 年に一人の農民宅の庭に茂るユーカリの木に現れた。イエスの到来で生成されつつある聖なる環境が壊れてしまうのを恐れ、はじめは一般公開するのを渋った。それで新たに誕生したイエスをブルーシートで覆うなどし、興味本位、冷やかしてやってくる人々、マスコミ、プロテスタント系セクトとの対面をコントロールした。したがって出現当初は、他の事例にあるような宗教的熱狂は感じられないが、蠟燭による占い・託宣と泥による霊的浄化により信者を拡大中。

さて、以上のように見てくると、ここで取りあげる 4 つの事例は、カトリック化が完了し教化が安定したほぼほぼ同時代に、同じ地域で、同じようなキリストが出現しているのに、その結末—まだ最終形ではないが—は互いに大きく異なる。この差をどのように説明すればよいのか。本発表は、4 つのキリスト出現の事例の提示と、事例から導き出せる問題点の指摘にとどめる。

【主要参考文献】

Kato, Takahiro, 1992, Auge y vigor de la fiesta de las cruces. En *El Qosqo: Antropología de la ciudad*, editado por H. Tomoeda y Jorge Flores Ochoa, pp.249-276, Centro de Estudios Andinos Cuzco, Cuzco.

Paz Flores, M. Percy, 1992, El Señor de Teteqaqa se da buen trato. En *El Qosqo: Antropología de la ciudad*, editado por H. Tomoeda y Jorge Flores

Ochoa, pp.225-248, Centro de Estudios Andinos Cuzco, Cuzco.

***Por favor* como estrategia de atenuación en peticiones en el español hablado en Medellín (Colombia)**

Ji Son JANG (Universidad de Antioquia)

Palabras claves: *Por favor, peticiones, cortesía, atenuación, español de Medellín*

***Please* as a mitigation strategy in requests in Spanish spoken in Medellín (Colombia)**

Keywords: *Please, requests, politeness, mitigation, Medellín Spanish*

Es indispensable comprender la norma de la cortesía establecida en cada sociedad al enfrentarse a una interacción para establecer y mantener una relación interpersonal armoniosa, evitando una situación conflictiva y, así, conseguir el efecto perlocucionario deseado [Jang & García 2018, 2023a].

En los últimos años las contribuciones que abordan la noción de la cortesía en el mundo hispanohablante se han multiplicado [Barros & Terkourafi 2014; Medina 2014]. Especialmente los estudiosos están trabajando con el fenómeno de la atenuación [Albelda 2020; Cestero 2020; Cestero & Albelda 2020] o con el concepto de imagen [Carrera 2015; Hernández 2013; Jang & García 2018].

Ahora bien, en el campo de los estudios relacionados con el concepto de la cortesía, es de sumo interés trabajar con los actos de habla *peticiones* que se asocian directamente con este concepto, ya que son actos de habla que prototípicamente pueden amenazar la imagen negativa del interlocutor [Brown & Levinson 1987; Jang 2012] y el éxito o el fracaso de una petición depende de cómo pedir en determinada cultura o sociedad.

Teniendo en cuenta lo anterior, en esta ponencia, se trata del uso frecuente del *por favor* en las peticiones en el español hablado en Medellín (Colombia) como estrategia de atenuación con una perspectiva pragmática sociocultural, con datos obtenidos a partir de una encuesta sociolingüística realizada a 361 informantes. La población estudiada está constituida por informantes de edades comprendidas entre los 18 y los 81 años. Desde un

punto de vista teórico, la investigación se basa en una perspectiva sociolingüística [Labov 1972] y en el modelo de la cortesía presentado por Brown y Levinson [1987], complementándolo con la noción de atenuación [Albelda 2016; Briz 1995; Cestero & Albelda 2020], teniendo en cuenta la perspectiva de la pragmática sociocultural [Bravo & Briz 2004]. Las variables sociales consideradas en este trabajo son el estrato socioeconómico, el sexo y la edad, los cuales han sido mayoritariamente objeto de investigaciones sociolingüísticas en la bibliografía especializada anterior [Chambers & Trudgill 1980; Hudson 1980; Labov 1972; Milroy 1980; Trudgill 1974], y que se han revelado como fundamentales en los estudios realizados en la comunidad de habla medellinense [García & Jang 2022; Jang & García 2023a, 2023b].

Del análisis realizado con base en la aplicación de un cuestionario a la población estudiada, se deduce que: 1) en Medellín suele considerarse una falta de respeto realizar una petición sin “por favor”; 2) el “por favor” en peticiones para Medellín tiene una función atenuadora y, así, protege la imagen del interlocutor; 3) el “por favor” en peticiones como una estrategia de atenuación es bastante frecuente en todas las esferas de la ciudad; 4) especialmente, el “por favor” atenuador es más preferido entre los ancianos y en los estratos bajos, es decir, los jóvenes, sobre todo, de los estratos altos lo emplearían con menos frecuencia. De este último hecho se infiere que, en Medellín, la cortesía negativa puede predominar entre ancianos y en la clase baja, y la cortesía positiva puede ser más notable entre jóvenes y en la clase alta.

【Referencia principal】

- Albelda, M., 2016, Sobre la incidencia de la imagen en la atenuación pragmática. *Rili*, 27: 19-32.
- Albelda, M., 2020, On the Mitigating Function of the Spanish Evidential *se ve que*. *Corpus Pragmatics*, 4: 83-106.
- Barros, M. y M. Terkourafi, 2014, What, When and How? Spanish Native and Nonnative Uses of Politeness, *Soprag*, 2.2: 262–292.
- Bravo, D. y A. Briz, 2004, *Pragmática sociocultural: estudios sobre el discurso de cortesía en español*, Ariel, Barcelona.
- Briz, A., 1995, La atenuación en la conversación coloquial. Una categoría pragmática, en *El español coloquial. Actas del I simposio sobre análisis del discurso oral*. ed. L. Cortés, pp.103-122, Universidad de Almería, Almería.
- Brown, P. y S. Levinson, 1987, *Politeness. Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Carrera, M., 2015, Identidad, imagen y (des)cortesía en Cartagena de Indias (siglo XVII). Diálogos surgidos desde el enfrentamiento étnico. *Textos en Proceso*, 1.2: 206-236.
- Cestero, A., 2020, Uses and resources of mitigation, in contrast. *Spanish in Context*, 17.2: 362-383. DOI: <https://doi.org/10.1075/sic.00063.ces>
- Cestero, A. y M. Albelda, 2020, Estudio de variación en el uso de atenuación I: Hacia una descripción de patrones dialectales y sociolectales de la atenuación en español. *Signos*, 53.104: 935-961. DOI: <https://doi.org/10.4067/S0718-09342020000300935>
- Chambers, J. y P. Trudgill, 1980, *Dialectology*. Cambridge University Press, Cambridge.
- García, A. y J. Jang, 2022, Consideraciones acerca de la noción de “usted” de solidaridad en el español hablado en Medellín (Colombia). *Signos*, 55.108: 212-34. DOI: <https://doi.org/10.4067/S0718-09342022000100212>
- Hernández, N., 2013, Actividad de imagen: caracterización y tipología en la interacción comunicativa. *Soprag*, 1.2: 175-198. DOI: <https://doi.org/10.1515/soprag-2012-0012>.
- Hudson, R., 1980, *Sociolinguistics*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Jang, J., 2012, Cambio pronominal momentáneo en las relaciones interpersonales solidarias en los jóvenes universitarios de Medellín (Colombia). en *Miradas multidisciplinares a los fenómenos de cortesía y descortesía en el mundo hispánico*, eds. J. Escamilla et. al. , pp. 178-212, Universidad del Atlántico-Programa EDICE, Barranquilla.
- Jang, J. y A. García, 2018, Descubriendo las imágenes predominantes en el grupo sociocultural de Medellín (Colombia): Imagen de ser y parecer trabajador. *Lingüística y Literatura*, 73: 37-53.
- Jang, J. y A. García, 2023a, Pragmática sociocultural del tuteo en el español hablado en Medellín (Colombia): caracteres refinado, cariñoso y afeminado. *Bulletin of Hispanic Studies*, 100.6: 583-600. DOI: <https://doi.org/10.3828/bhs.2023.37>
- Jang, J. y A. García, 2023b, El voseo como orgullo paisa: el uso pronominal en el español hablado en Medellín (Colombia). *Boletín de Filología*, 58.2: 347-369. DOI: <https://doi.org/10.4067/S0718-93032023000200347>
- Labov, W., 1972, *Sociolinguistic Patterns*. University of Pennsylvania Press, Filadelfia.
- Medina, J., 2014, Disculpas, cortesía ideológica y restauración de la imagen: a propósito de un real ejemplo a través de la prensa. *Soprag* 2.1: 35-75. DOI: <https://doi.org/10.1515/soprag-2013-0015>
- Milroy, L., 1980, *Language and Social Networks*. Blackwell, Oxford.
- Trudgill, P., 1974, *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. Pelican Books, Londres.

Autoideologías hacia el español pastuso (Colombia)

Ana Isabel GARCÍA TESORO (Universidad de Antioquia)

Palabras clave: sociolingüística, ideologías lingüísticas, actitudes lingüísticas, Colombia

Autoideologies toward Pastuso Spanish (Colombia)

Keywords: Sociolinguistics, Language Ideologies, Language Attitudes, Colombia

El presente estudio aborda las ideologías y actitudes lingüísticas hacia el español hablado en Pasto, otras variedades de español en Colombia y de otros países hispanohablantes. Se analizaron 30 entrevistas sociolingüísticas realizadas en Pasto en 2024 a participantes de diferentes características sociolingüísticas.

Pasto se encuentra en un área cercana a la frontera con Ecuador donde se observan flujos de migración constantes desde este país y la confluencia de hablantes de diversas variedades de español, que en algunos casos son bi/multilingües en español y lenguas indígenas como quichua, cofán, awa, nasa yuwe u otras, dando lugar así a una situación de contacto y migración de gran complejidad lingüística. En diversos estudios se ha señalado que la variedad de español del área andina del sur de Colombia es considerada un área de bilingüismo histórico de contacto, especialmente con la lengua quichua, y comparte muchas de sus características con el español en contacto con el quechua hablado en el área de andina de Ecuador, Perú y Bolivia. Rasgos como un fuerte consonantismo, la realización débil o pérdida de las vocales átonas, el rehilamiento de la vibrante múltiple /r/ (*perro* /pézo/, /péso/), el uso de *pero* en posición final de la oración como marcador discursivo con valor enfático (*¿Se ha visto Love is in the air? [...] Buenísima pero*) o atenuador (*Ayúdame pero*), las perífrasis con gerundio como *dar* + gerundio (*Dame trayendo una cajita de fósforos* ‘trae los fósforos, por favor’), el uso del gerundio de anterioridad (*Vine comprando la sal* ‘compré la sal antes de venir’), o el empleo del futuro perifrástico como orden o petición atenuada (*Esta revista está muy buena, papitos,*

mamitas, comprarán) [Haboud 1998; entre otros], entre otros, son características comunes que, en muchos casos, se constituyen como rasgos indexados. Aunque no es bien conocida, es una de las variedades de Colombia que recibe las actitudes más negativas [Bernal, *et al.* 2014], y aunque en ocasiones se asocia con valores positivos como que su acento es “dulce” o “gracioso”, los chistes de pastusos o valorar su habla como graciosa se constituyen como una discriminación burlesca, y usualmente se identifica con lo rural, lo subdesarrollado, con personas poco inteligentes, inocentes y no profesionales, entre otros.

Los resultados muestran que la población de Pasto muestra lealtad hacia su variedad y valor sentimental hacia su forma de hablar, especialmente en personas mayores. No obstante, también se registran valoraciones muy negativas basadas en ideologías lingüísticas que relacionan su forma de hablar con la falta de desarrollo, la pobreza y la ruralidad, especialmente entre los más jóvenes, que llegan a afirmar que no hablan bien, y en las que se observa la clase social como elemento interseccional que relacionan los rasgos de la variedad pastusa como un español propio de personas de un nivel sociocultural bajo (*Si me criaron con el estigma de hay un español formal que se habla bien y otro no, entonces para mí ha sido más una discriminación de clase que otra cosa*). Igualmente, muestran actitudes positivas hacia el habla de la capital, Bogotá, y de otras grandes ciudades como Cali o Medellín, pero muy negativas hacia las variedades de la costa caribeña y atlántica (*P: ¿Dónde crees que hablan peor el español aquí en Colombia? R: Ah, los costeños. P: ¿No te gustan cómo hablan? P: No, no se les entiende y hablan un*

poco de vulgaridades, no se les entiende y es pura vulgaridad). Así mismo, reconocen tratar de cambiar su acento al salir de Pasto, y en algunos casos la discriminación que sufren en otras regiones de Colombia por su acento, que se relaciona con la idea de ruralidad y falta de desarrollo socioeconómico del área andina.

Por otro lado, no se identifica en ningún caso el habla de Pasto con una influencia o sustrato de quichua u otras lenguas indígenas, pues persiste la idea de no tener ninguna relación con lo indígena (*posiblemente eso pudo haberse dado en otro tiempo, pero como la lengua cada vez que pasa el tiempo se va estandarizando, entonces el dialecto pastuso que tenía hace unos 20, 25 o 30, 50 años, algunas tonalidades o préstamos del quichua, ¿no? (...) hay muchos términos que ya no se usan*). Los rasgos de su variedad que en la bibliografía especializada se atribuyen al contacto con lenguas indígenas, no son identificados e interpretados de esa manera por la población pastusa, se suele negar su uso y no se reconoce la influencia del quichua u otra lengua indígena, se atribuye incluso al contacto con el inglés (*P: Estamos armando un árbol de Navidad y yo le digo a mi hermano “pásame el cable pero”. ¿La ha escuchado, la usa...? R: Sí, la ha escuchado. P: ¿Cree que la usa? R: No. (...) Y tiene mucho relación con el inglés porque en inglés también se dice el duh, yo creo que puede ser una transferencia del inglés*). Las variedades de español de contacto se consideran incorrectas y se muestran actitudes puristas hacia las lenguas indígenas, que ven con simpatía y cierto exotismo.

Todos los informantes afirman reconocer sin problema la variedad ecuatoriana, pero también que es claramente diferente a la colombiana (*Sí, se siente la diferencia en los ecuatorianos, de una, porque hablan más rápido, así como arrastrando, no se les entiende*). Pocos reconocen las similitudes del español ecuatoriano con la variedad pastusa, y cuando se les pregunta por variedades similares a la suya mencionan la mexicana o la argentina. Se observa la

necesidad de diferenciación con Ecuador y la discriminación sufrida por parte del resto de colombianos (*no sé si más bien tenga que ver más bien con esta necesidad de diferenciación de Colombia a Ecuador (...) y esta idea de los nariñenses no somos colombianos, entonces eh... es algo así como Colombia me discrimina, yo de paso discrimino a los ecuatorianos por lo mismo que me discriminan los colombianos.*), también actitudes negativas hacia los indígenas y su forma de hablar español (*el boliviano me parece... o sea, to- qué horrible... pero eso, o sea... ciertos acentos del español andino que se asemejan más a culturas indígenas se me ha enseñado a discriminarlos. Y yo sé que está mal, pero se me ha enseñado a discriminarlos*).

Finalmente, consideramos necesario promover la investigación y el conocimiento de la diversidad lingüística y el respeto por todas las formas de expresión, combatir ideologías discriminatorias y clasistas que llevan a actitudes negativas hacia las lenguas y variedades de contacto, así como desmitificar ideologías que generan actitudes muy negativas y prácticas de higiene verbal.

【Referencia principal】

- Bernal, Julio, Munévar, Alejandro y Barajas, Catalina, 2014, Actitudes lingüísticas en Colombia. In *Actitudes lingüísticas de los hispanohablantes hacia el idioma español y sus variantes*, edited by Ana Beatriz Chiquito y Miguel Ángel Quesada Pacheco, pp. 189-245, Bergen Language and Linguistic Studies (BeLLS), 5. DOI: <https://dx.doi.org/10.15845/bells.v5i0.680>
- Haboud, Marleen, 1998, *Quichua y castellano en los Andes ecuatorianos: los efectos de un contacto prolongado*. Abya-Yala/GTZ, Quito.

レイメバンバ共同体博物館の現状と課題

上原なつき（名桜大学）

キーワード： コミュニティ開発、博物館、コミュニティミュージアム、チャチャポヤ文化

Situación actual y dificultades del Museo Comunitario Leymebamba

Natsuki UEHARA (Meio University)

Keywords: Desarrollo Comunitario, Museo, Museo Comunitario, Cultura Chachapoya

1. はじめに

発表者は現在、JICA 海外協力隊として 2025 年 5 月から 2026 年 12 月までの計 1 年 8 ヶ月間（国内外訓練期間を含めると計 2 年間）、ペルー北部のアマソナス州チャチャポヤス郡レイメバンバ村にあるレイメバンバ共同体博物館（Museo Comunitario Leymebamba. レイメバンバ博物館とも表記されるが本発表では西語表記に基づき和訳。）にてボランティア活動を行っている。職種はコミュニティ開発である。

レイメバンバ共同体博物館は 2000 年に設立され、2025 年 6 月に創立 25 周年を迎えた。当博物館には、1997 年にレイメバンバ村近郊のコンドル湖（Laguna de Los Condores）のチャチャポヤ文化の墓から発掘された 219 体のチャチャポヤ・インカ期のミイラが収蔵・展示されている。

ペルー国内に現存するミイラの多くは先インカ期のものである。かつてインカ帝国の帝都であったクスコに現在ある複数の博物館には、いくつかのミイラが展示されているものの、発掘場所等の来歴が不明なものがほとんどである。このような現状において、当博物館のチャチャポヤ・インカのミイラは、年代および発掘場所が明確なインカ期のミイラとして非常に貴重とされており、海外でもたびたび展示されている。

また、同じくコンドル湖の墓で発見された 33 個のキープ（結縄記録）もレイメバンバ共同体博物館には収蔵されているが、発掘時の状況およびそのコンテクストがわかるキープとして資料的価値が高いとされる。これらを含め 2,000 点以上の様々な物品が当博物館には収められている。

地方農村にある小さな博物館でありながらも、これら考古学的価値の高い資料が収蔵されてい

るため、国内外研究者の訪問も後を絶たない。

このように、世界的に有名なレイメバンバ共同体博物館が JICA へボランティアを要請したということは、現状において何かしらの課題があり、その課題の解決ないし改善を求めていると考えられる。ちなみに、JICA 海外協力隊が当博物館で活動するのは発表者が初めてとなる。

2. なぜ「コミュニティ開発」の要請なのか

まず浮かぶ疑問として、レイメバンバ共同体博物館はなぜ学芸員ではなくコミュニティ開発の職種でボランティアを要請したのかという点である。当博物館から JICA へのボランティア要請理由は以下の通りである。

レイメバンバ博物館は、観光を通じた持続可能な博物館として、地域における観光および文化の中心としての役割を担い、州全体において教育・文化・経済的な発展に貢献することを目指している。現在、地元民で構成されるレイメバンバ博物館協会には約 30 名が参加、必要に応じて博物館業務を支援しているほか、様々な意思決定にも参加している。隊員には、地元住人とレイメバンバ博物館の関係性をより強固なものとするための活動が期待されているが、それに留まらず博物館をより良くする提案や、多方面にわたる活動を求めている。博物館協会メンバーだけでなく、地元住民が博物館に愛着をもち、自分たちの文化を誇らしく感じられるような博物館を目指している [JICA 2023]。

最後の一文にあるように、「地元住民が博物館

に愛着をもち、自分たちの文化を誇らしく感じられるような博物館を目指している」というニーズから、「コミュニティ開発」の職種で要請がなされたといえる。また、当博物館には考古学専門の職員が 1 名、写真学および博物館学が専門の職員が 1 名いるため、学芸員ボランティアは現状のところ必要とされていない。

上記のニーズから、ボランティアとして発表者が現在取り組んでいるのは、将来、博物館を支える存在となる地域の子供たちに博物館に親んでもらうと同時に、地域の経済発展と伝統工芸継承を実現するため、地元の工芸家らと協働して子供向け工芸ワークショップを実施している。その他、高齢者から地域の昔話および歌謡の収集と撮影記録も予定しており、無形文化の継承と資料保存にも取り組む予定である。

3. 共同体博物館の所有と運営について

上記の要請理由ではレイメバンバ博物館協会 (Asociación de Museo Leymebamba) にしか言及されていないため、当協会が運営を担っているように読み取れるかもしれないが、実際に当博物館の運営・管理を担っているのは、生物考古学者の G 博士が代表を務める NGO セントロ・マルキ (ONG Centro Mallqui) である。先述の職員 2 名は当 NGO に所属している。

セントロ・マルキはミイラ研究を専門とする研究機関であり、レイメバンバ共同体博物館の他に、ペルー南部のモケグア州イロにもミイラ研究所を有している。

コンドル湖岸壁の墓でミイラが発見されたことをきっかけに、ミイラ研究の専門家である G 博士に白羽の矢が立った。G 博士のそれまでの研究業績と、セントロ・マルキが研究機関として海外から資金援助を受けている実績が評価されて、発掘だけでなく、博物館設立と運営までを任されることとなった。

G 博士がセントロ・マルキの代表と博物館の館長を兼任しているため、両機関は混同されやすいが、博物館の所有者はあくまでもレイメバンバの地元住民であり、形式上はレイメバンバ博物館協会がその所有組織となっている。

レイメバンバ共同体博物館は「共同体博物館」ではあるものの、レイメバンバ村やチャチャポヤス郡などの行政はおろか、文化省などの公的機関からも一切、経済的支援を受けていない私立博物館である。運営費は入館料収入のほか、セントロ・マルキが海外の複数機関から受けている資金援助である。

当博物館の所有組織であるレイメバンバ博物館協会は、現在約 30 名の会員を有している。レイメバンバ博物館協会は日常の博物館運営や管理には直接的には関わらないものの、必要な際に会議を開き、その承認や決定を担う。また、重要な議題の場合は当協会だけで閉鎖的に会議を行うことはせず、村役場、レイメバンバ観光協会、農業者協会、教育センター、文化の家など、地元の様々な組織にも出席してもらい、共同体全体で話し合っただけ承認を得るというプロセスを重視している。

4. レイメバンバ共同体博物館が抱える課題

パンデミックによる来場者数の減少と収入減、航空便の少なさと悪路によるアクセスの不便さ、パンデミックを機に創設時から勤務していた地元従業員が次々に退職、従業員が近隣住民同士のためその人間関係が職場に与える影響、地域住民との協力体制作りの中心人物であった従業員の休職、館長の人脈や研究業績への評価による海外からの資金援助への依存および館長の高齢化に伴う持続可能性への危惧、コミュニティへの運営移行を目指しているものの村役場が博物館の価値を真に理解しているとは言い難い状況など、様々な課題が挙げられる。

【主要参考文献】

- Guillén, Sonia, Peter Lerche, Evelyn Guevara, 2011, *Chacha motivos en el Museo Leymebamba: Diseños para el arte y la artesanía*. Gráfica Real del Perú SAC, Lima.
- JICA, 2023, 「2023 年度 秋 要望調査票」、『JICA 海外協力隊 HP』。 <https://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/index.php?m=Info&yID=JL32723B02>

近年の南アンデス・ケチュア語口承文学におけるテキスト公刊とその「読み」の可能性

藤田護（アンデス・オーラルヒストリー工房、慶應義塾大学）

キーワード： 口承文学、ケチュア語、語り、文体

Las recientes publicaciones de la literatura oral quechua surandina y sus posibles lecturas

Mamoru FUJITA (Taller de Historia Oral Andina, Universidad de Keio)

Keywords: *literatura oral, quechua, narrativa, estilística*

1. はじめに

南アンデス高地にはアイマラ語とケチュア語という二大先住民言語があるが、口承文学の物語世界はアイマラ語圏とケチュア語圏で厳密に分けられるものではない（ただし蛇の力を得た女性の物語であるチョケル・カミル・ウィルニータはアイマラ語圏では非常によく知られているが、ケチュア語圏では管見の限り見たことがない）。またアイマラ語とケチュア語は文法や語彙が互によく似ているため、それぞれの語りの文体にも似ている点があり、その類似点と相違点の検討が必要になる。ここでは、近年のケチュア語の口承文学の記録の新たな公刊をとりあげ [Gutman 2023a, b, Durston, Itier y Landeo Muñoz 2024]、アイマラ語口承文学を主に研究する立場からこれらの物語りの特徴を検討する。

2. 収められている物語の種類と特徴（「物語世界」）

Gutman [2023b]は物語を主題に併せて分類しており、ここにはアンデス広域にみられる物語と、記録がとられたクスコ県南部のポマカンチ独特の物語があると言えそう。前者には、山、フアン・エスコペタ、ヘンティル、コンデナード、ドゥエンデ、様々な動物譚があり、後者にはカンチマチュの物語や湖が主題になった物語がある。

Durston, Itier, y Landeo Muñoz [2024]においては、「神話」と位置づけられるような物語がなく、その土地独自の伝承と位置づけられそうな物語もないため、物語自体のバリエーションはそれほど大きくない。その一方で、これらの物語が村の具体的な民俗習慣や歌と組み合わせて記録さ

れていることが興味深く、編者らもこの回復された文書を『ワロチリ文書』になぞらえている。

以下、具体的な物語世界について、Gutman [2023b]に基づいて何点かを検討する。

（１）カンチ・マチュの物語

カンチ・マチュ（Qanchi Machu、マチュは「老人」）は、この世界を創出したとされる民族集団としてのカンチスの文化英雄であり、以下のように集団の本質を体現する存在とされる——
Hinaspas chiqaq qanchis chay Qanchi kasqa. [ibid.:76]

（スペイン語訳（筆者による）——Siendo así verdadero qanchis ese Qanchi (Machu) había sido.）
他のマチュたちと関わり、競いながら物語が展開し、石（＝土木工事）を操り、またインカの支配に服しながらインカの意向に完全には従わないなど、『ワロチリ文書』におけるワロチリのワカたちの振る舞いとよく似ていると言えそうだ。

（２）動物譚

動物同士が関係する物語では、言葉を通じて異なる種のあいだで意思疎通ができる。それぞれの種が「動物」的な特徴と「人間」的な特徴（文化）を兼ね備えている。

それに対し、動物と人間が関係する物語では、人間は基本的に動物に騙され、動物側の意向を人間が分かっていないことが多い——

“Maypitaq, papáy, qurpachaykimanri? Kuskay’puñukusunchis, riki. Kuskallapunin visitaykuwanqa puñukuyku”, nispa nisqa. [ibid.:288]
（スペイン語訳（筆者による）——“¿Y dónde pues, papáy, podemos alojarte? Juntos pues nos dormiremos, ¿no? Juntos nomás siempre con nuestras

visitas nos dormimos” diciendo había dicho.)

この発話はノミの姉妹によるものであり、人間に姿を変えて上のような言葉で誘惑しつつ、最後には人間を食べてしまう。また、自分が料理したスープを食べてしまった犬を殺した旅人が、犬社会の判事ら上役たちに当該の犬への虐待を糾弾され、食い殺される物語もある。このような分かり合えない得体の知れなさのなかで、人間は動物と関係をしている（[藤田 2023]も参照）。

（3）山岳神（アプ）

アプはビクーニャを人間にとってのリヤマのように使っている——

Hinaspán chay wik'uñakunas, chay linajekunaq wik'uñansi, llamansi cargayukuspas tuta purin. [ibid.:36]

（スペイン語訳（筆者による）——Siendo así, esas vicuñas, dicen, de esos linajes su llama, dicen, su llama, dicen, cargando, dicen, de noche camina.）

アプは人間の病気を治すことができる

“Arí, khaynatan, khaynatan nuqayku unquyku. Chaymi, arí, linajey, linaje wahachikamuykiku. [...]” “Imaynataq mana nuqari hampiymanchu. Bueno, makillaywanyá llamp'isay.” [ibid.:32]

（スペイン語訳（筆者による）——“Sí, así y así nosotros nos hemos enfermado. Eso sí, mi linaje, linaje hemos hecho llamar. [...]” “¿Y cómo yo no voy a poder curar? Bueno, con mi mano nomás pues tocaré.”）

シャーマンが呼び出すことで、人間は山岳神と直接接触をして、やり取りをすることが可能になる。山岳神は人間の形で出てきており、linajeという別称からも祖先神としての位置づけが読みとれる。人間と祖先神との関係は、ブラジル人類学者エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロが提示した「パースペクティヴィズム」や「多自然主義」の考え方に共鳴する面がある。

3. 語りの文体の特徴

ケチュア語の伝聞を示す形式には、遠隔過去を示す動詞の活用形式-sqa と、伝聞を示す接尾辞-s/-si が存在する——

Urqupisi atup ukuchawan tiyasqa. Ninakusqaku

“kumpari, kunanmi santunchik” nispa. Atupñataq nisqa, “kumpari, hitarrata tukamuchkay”. Hinaspañataqsi ninawan kañaykusqa. [ibid.: 67]

（En el cerro, dicen, con un ratoncito había vivido. Habían dicho entre ellos “compadre, ahora es nuestro santo (cumpleaños)” diciendo. Y el zorro ya había dicho, “compadre, guitarra estate tocando”. Y siendo así, dicen, con el fuego la había quemado.）

Durson, Itier y Landeo Muñoz [2024]においては、最初は遠隔過去を示す動詞屈折接尾辞-sqa と伝聞を示す接尾辞-s/-si を併用して語り始め、徐々に-s/-si だけを用いて動詞は単純形（現在形）で活用させるようになることが多い。

Gutmann [2023b]においては、同様に-sqa と-s/-si を併用するものも多いが、最初から-s/-si しか用いないものもあり、最初から単純形（現在形）しか用いられない物語もあり、動詞 parlay「話す」や niy「言う」を多用することで伝聞を示している場合もある。

暫定的な仮説としては、元が筆録資料であるらしい Durston, Itier y Landeo Muñoz に対し、Gutman の方が、より会話的環境の中で記録が行われており、より語用論的な意図が話者のなかで前面に出てくると、文体のバリエーションが大きくなるのではないだろうか。

【主要参考文献】

- Gutman, Margit, 2023a, *El Qanchi Machu aún vive (tomo I). Cuentos orales quechuas de Pomacanchi*. Arequipa: Ediciones El Lector.
- Gutman, Margit, 2023b, *El Qanchi Machu aún vive (tomo II). Antología de cuentos orales quechuas de Pomacanchi*. Arequipa: Ediciones El Lector.
- Durston, Alan, César Itier y Pablo Landeo Muñoz, 2024[1957-8], *Textos quechuas de la zona de Coracora*. Toronto: York University Library.
- 藤田護、2023、「口承の物語に現れる人間と動物の関係を読み直す——南米アンデス高地のアイマラ語と北東アジアのアイヌ語の物語テキストから」、『言語文化と政策（シリーズ総合政策学をひらく）』宮代康丈・山本薫編、pp.61-76、慶應義塾大学出版会。

ボルソナロ政権期のブラジル土地改革と小農たち

石丸香苗（福井県立大学）

キーワード： 家族農業、マイノリティ、右派政権、政権交代

Brazil's Agrarian Reform and Small farmers under the Bolsonaro Administration

Kanae ISHIMARU (Fukui Prefectural University)

Keywords: Family Farming, Minorities, Right-wing Government, Change of Government

1. はじめに

ブラジルの社会構造はその歴史的背景ゆえ、大多数の低所得者層とわずかな富裕層を内包する [佐野 2013]。この構造はポルトガル帝政期に国防のためポルトガルの有力者に領地配分を行ったカピタニア制を根源として、その後 500 年あまりにわたって民衆への土地の再配分が行われなかったことに基本的原因を有する。そのため、ブラジルにおける土地改革は、歴史的に固定化した構造的不平等の是正という側面を持つ。

カルドゾ政権（1995-2003）以来、公に取り組まれてきた土地改革への取組は、左派政権である労働者党政権（ルラ：2003-2011、ジウマ：2012-2016）下で特に推進されたが、所有地を脅かされる中上流層からの反発や批判は大きかった。2019 年の大統領選挙で、汚職疑惑による左派政権への反動で大統領に選ばれた右派ボルソナロの支持者層は、大規模農業・牧畜業を営むフラリスタ（Ruralista 農牧族）と呼ばれる層であった。

ボルソナロは小農や先住民などの様々なマイノリティや環境保護に対して批判的な言質を繰り返したが、本報告ではボルソナロ在任中のブラジルにおける土地改革や小農の活動がどのように変化したかを調べ、それら言動や政策の影響を検証する。

2. ブラジルの土地改革

上記のように、ブラジルの土地改革は歴史的に固定化された格差是正の側面を持つ。1988 年憲法 144 条には「すべての土地は有効に利用されなくてはならない」という一文があり、土地改

革運動の有効性を憲法が保障する根拠とされている。

土地改革運動の一般的なプロセスは、最大勢力 MST はじめ支援組織が占拠可能な土地を探し、占拠に参加する人たちを募る。一年程度のアカンパメントと呼ばれるキャンプ生活ののち、土地を区分けして農業生産等を開始し、土地改革院（INCRA）に土地収用の申請を行う。土地改革院が折衝して所有者から土地を収用すると、土地改革へ参加する人々は使用許可契約・所有権譲渡・物的使用権譲与のいずれかの契約を得る。1985 年から 2010 年にかけて、カルドゾ政権とルラ政権の間に約 1450 万 ha 以上が収容され、115 万世帯が入植したとされる [Mattei 2012]。

3. 大統領在任時のボルソナロの言説

ボルソナロは大統領に就任すると、土地改革を実現するための手段の解体を目指し予算制限を行うとともに、INCRA を農業開発・家族農業省から、アグリビジネスを担当する農牧供給省（MAPA）へ移管することで機能不全化を目指した。CUT は 2021 年の記事で、「INCRA の首脳陣は連邦最高裁判所に対し、ボルソナロ大統領が 413 件の土地改革プロセスを停止し、入植地建設のための収用に関する検査分析を中断し、2019 年の政権発足以来いかなる収用令にも署名しておらず、執行した予算は最低であり、農地改革のための土地取得も 1995 年以来最低であると報告した」と伝えている。また、2019 年の土地収用実績は 11 万 1 千 ha とそれまでの約 1/10 にとどまった [Aragão 2021]。

4. 土地改革に関する活動の反応

左派政権であった 2003 年から 2015 年まで、特にルラ政権前半の新規アセンタメント居住者数は急上昇して 2006 年には 15 万人に迫る勢いで増加した（図 1）。これは土地改革に親和的な左派政権下において、土地改革運動を推進する方向へと機運が存在したことが考えられる。しかし一方で、土地権利書の発行数はテメル・ボルソナロ期に大きく跳ね上がっていた。

図 2 は土地改革に関する土地占拠者への暴力件数と、抵抗運動の件数である。右派政権期には暴力件数が増加し、抵抗運動の件数は減少していた。この傾向は 2023 年のルラ政権への移行後も続いており、暴力件数の約三分の一がマトグロソ州とパラ州の大規模農場が広がる地域において発生している。

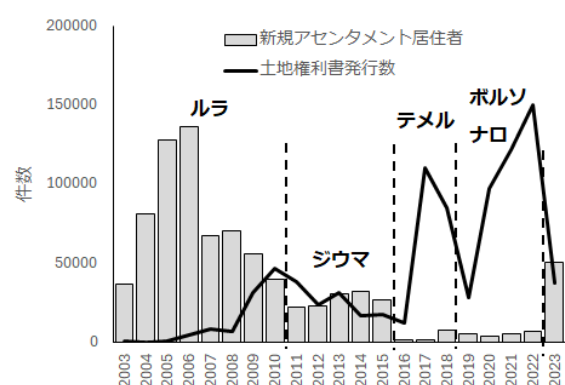


図 1 各政権期における新規アセンタメント居住者数と土地権利書発行数 [出典：INCRA より筆者作成]

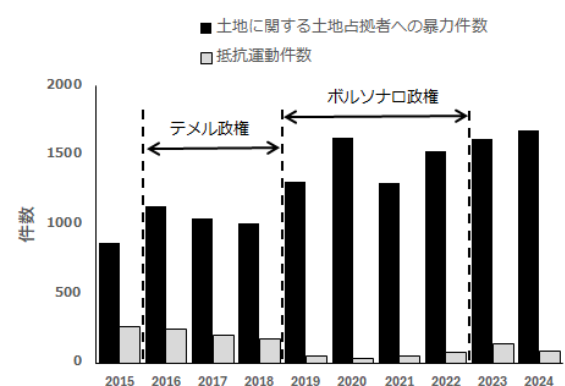


図 2 土地改革にまつわる暴力等の件数 [出典：CPTCEDOC Dom Tomás Balduino – CPT から筆者作成]

5. 行政組織の農業支援の現場での対応

マトグロソ州の環境局およびアセンタメントでの EMATER（農業普及指導員）に対して、政響したかを質問した。両者とも、現場での実際の活動自体には大きな影響はなく、技術職員として必要とされることを同じように続けていたとの意見であった。

6. まとめ

ボルソナロ政権下の土地改革は、土地収用や分配手続きの停止をとおして大きく減速し、新規入植者は減少した。また、融資政策の制限をとおして、小農・家族農への支援はマイナスの影響を与えたことがうかがえる。一方では土地改革の権利書の発行数は激増し、農業普及員等の現場での活動支援等の制限は受けなかったと考えられ、土地改革や家族農業に対するその影響力は一概に一つの傾向に片付けることは難しい。

【主要参考文献】

- Aragão, Érica, CUT, 2021, *Ações de Bolsonaro contra reforma agrária e agricultura familiar impactam seu bolso*. <https://www.cut.org.br/noticias/acoes-de-bolsonaro-contr-reforma-agraria-e-agricultura-familiar-impactam-seu-bo-fe02> (最終アクセス 2025/7/29)
- CPT Centro de documentação Dom Tomás Balduino, 2025, *Conflitos no campo Brasil 2024*, 32 p, Comissão pastoral da terra, Goiânia.
- INCRA, 2020, *Titulação de assentamento*. <https://www.gov.br/incra/pt-br/assuntos/reforma-agraria/titulacao> (最終アクセス 2025/7/23)
- L Mattei, 2012, A reforma agrária brasileira: evolução do número de famílias assentadas no período pós-redemocratização do país. *Estudos Sociedade e Agricultura*, Vol.20, no.1, 301-325.
- 佐野聖香、2013、「ブラジルの土地所有構造と土地制度—家族農業支援と外国による農地買い占めの現状」、『ラテンアメリカの土地制度とアグリビジネス調査研究報告書』、北野浩一編、pp.54-79、アジア経済研究所。

アンデス・アマゾン学会ホームページ
URL : <https://sanams.web.fc2.com>

アンデス・アマゾン学会事務局
〒905-8585 沖縄県名護市為又 1220-1
名桜大学 国際学部 長尾研究室気付
事務局連絡先 : anam.estudios@gmail.com

アンデス・アマゾン学会研究発表要旨集 14 号
Proceedings of the Annual Conference of SAAS
Volume 14

発 行 日 : 2025 年 11 月 20 日
編集・発行 : アンデス・アマゾン学会
発 行 者 : 会長 大平秀一
編集代表者 : 工藤由美